合唱団へのお誘い

金沢高校PTA混声合唱団は、横浜市立金沢高校のPTAまたは元PTAを主体とし、同校の音楽室を練習場所としています。

コーラス未経験の方はもちろん、歌に自信がないけれど音楽が好きな方は大歓迎です。ご夫婦で参加している団員も現在３組となり、夫婦が共通の趣味を持つ機会としてもお奨めです。

練習中は笑いが絶えず、お腹の底から歌うことで健康増進。心に染み入る歌に感性も磨かれ、日常を忘れてストレス解消にもなります！　ぜひ気楽に練習の見学にお越しください。

練習：原則として第一、第三土曜日14:00～16:00（変更の場合があります）
参加：神奈川県合唱祭（６月）、金沢区音楽のつどい（10月）、
金沢高校の入学式（４月）、金高祭（９月末～10月初）ほか

連絡先：０４５－７８２－９７１０（会長　清水）
またはE-Mail：kanako@chikyu-to-umi.com
ホームページ　http://chikyu-to-umi.com/pta/

金沢高校PTA混声合唱団
第1回演奏会

「想い」を歌にのせて･･･

2008年8月3日（日）

開場 14:00　開演 14:30

磯子区民文化センター杉田劇場

後援：横浜市立金沢高等学校　金沢区役所　神奈川県合唱連盟　金沢区文化協会
神奈川新聞社　JCNよこはま　タウンニュース社　ｔｖｋ　はまかぜ新聞社

ごあいさつ

本日はご多忙の中、ご来場いただきまして誠にありがとうございます。
金沢高校ＰＴＡ混声合唱団は、金沢高校創立４０周年の記念演奏会を機に1992年５月に発足し、今年で１６周年を迎えました。以来、元金沢高校教員の飯塚城永先生のご指導のもと毎月２回、金沢高校音楽室で練習を続け、主に神奈川県合唱祭、金沢区音楽のつどい、金高祭に参加し歌ってきました。また、金沢高校創立５０周年の時には生徒、卒業生、教職員、新旧保護者他の皆様と一緒にベートーベンの交響曲第９番「歓喜の歌」を歌いました。そして昨年１５周年を迎えた頃から独自の演奏会を開きたいという団員全員の気持ちが盛り上がり、本日を迎えることができました。
本日の演奏会は今まで私たちが歌ってきた思い出深い曲を中心に構成しました。実力はまだまだですが、普段の楽しい雰囲気をそのままに私たちの「想い」を感じていただければ幸いです。
どうぞ暑さを忘れて、最後までごゆっくりお楽しみ下さい。

実行委員長 森田 賢一

第１回演奏会に寄せて

金沢高校PTA混声合唱団の初めての演奏会開催、誠におめでとうございます。日頃の皆様の練習の成果が発揮され、演奏会が成功を収めますことをお祈りしております。
皆様には、金沢高校の入学式や金高祭、また記念行事等の諸行事に参加され、合唱し、PTA活動促進の一端を担っていただきまして感謝いたしております。
今年は、合唱団創設16年を迎え、金沢高校PTA混声合唱団のますますのご発展を祈念するとともに、今後とも陰ながら応援させていただきたいと存じます。

横浜市立金沢高等学校 校長　柳田 緑雄

プログラム

「横浜市立金沢高校 校歌」　作詩 大木惇夫　作曲 小倉　朗

…… 第１ステージ ……

「緑の森よ」　作詩 緒薗 凉子　作曲 F. Mendelssohn
「アニー・ローリー」　作詩 堀内 敬三　作曲 J. D. Scott
「埴生の宿」　作詩 里美　義　作曲 H. R. Bishop
「赤とんぼ」　作詩 三木 露風　作曲 山田 耕作

…… 第２ステージ ……

（女声）
十代のための二部合唱曲集『白い歌　青い歌』より
「海」　作詩 谷川　雁　作曲 新実 徳英
「薔薇のゆくえ」　作詩 谷川　雁　作曲 新実 徳英
「ぶどう摘み」　作詩 谷川　雁　作曲 新実 徳英

（男声）
「いざ起て戦人よ」　作詩 藤井 泰一郎　作曲 J. McGranahan
「フィンランディア賛歌」　作詩 関　忠亮　作曲 J. Sibelius
「見上げてごらん夜の星を」　作詩 永　六輔　作曲 いずみたく

休　憩

…… 第３ステージ ……

混声合唱組曲『心の四季』より
「風が」　作詩 吉野　弘　作曲 高田 三郎

混声合唱曲集『光と風をつれて』より
「あいたくて」　作詩 工藤 直子　作曲 木下 牧子

混声合唱組曲『水のいのち』より
「川」　作詩 高野 喜久雄　作曲 高田 三郎

混声合唱とピアノのための『花に寄せて』より
「てっせん・どくだみ」　作詩 星野 富弘　作曲 新実 徳英

混声合唱組曲『筑後川』
「河口」　作詩 丸山　豊　作曲 團 伊玖磨

曲目紹介

第１ステージ

「緑の森よ」

「森」、「孤独」などロマン派を代表する言葉に満ちたアイヒェンドルフによるこの詩は、フレデリック・メンデルスゾーンによって“Abschied vom Wald”「森との別れ」として作曲されました。ドイツ人にとって「森」の意味するところは大変深く、我々には理解が難しいところもありますが、ユニゾンで始まるこの曲は、しずかにしかし決然と、「森」と「自己」とのかかわりあいを歌っています。

「アニー・ローリー」

アニー・ローリーは、１７世紀後半に生まれ、スコットランド中に鳴り響いた美人だったと言われています。没年は定かではありませんが、生家には今も彼女の肖像が残されており、その昔、みなの心をとりこにしたという青い瞳の佳人をうかがい知ることができるそうです。曲が作られたのは１９世紀半ばで、詩は何度か書き直しされたようです。

「埴生の宿」

英語のタイトルは、“Home, Sweet Home”。日本語のタイトルは「埴生の宿」。この「埴生の宿」とは「土で作った粗末な家」ということです。つまり、どんな家であっても、我が家は我が家。心が温かく、豊かになれるのは我が家であるという歌詞です。今までにさまざまな場面で歌われていますが、有名なのは『ビルマの竪琴』や『火垂の墓』でしょうか。

「赤とんぼ」

日本を代表する歌曲です。三木露風は、父が放蕩で身を持ち崩し、母は露風が７歳の時に彼女の実家に帰ってしまいました。その後預けられた家で、彼の面倒を見てくれた「姐や」への想い出が非常に強く残っていたようです。「私が幼い頃、子守り娘が私を背中に背負うて広場で遊んでいた。その時背の上で目にしたのは赤とんぼであったかなぁ」と、のちに露風自身は語っています。

第２ステージ

十代のための二部合唱曲集
「白い歌　青い歌」より
「海」
「薔薇のゆくえ」
「ぶどう摘み」

この曲集は作曲先行で生まれたものです。作曲者の新実徳英さんはこう言っています。「月に一度、自分の中からあるいは世界のいろんな民謡、民族音楽から気に入った節を拾い出し、一篇の歌に仕上げる。」と。正確に言えば、この段階ではまだ「歌」にはなっていません。歌詞がついていないのですから。

この「イメージ」を録音したテープが作詞者の谷川雁さんのもとに届けられ、そこからこの「イメージ」が徐々に「歌」になっていきます。谷川雁さんはこう書いています。「ぼくが十代だった戦争のさなかでも心にしみるものはむしろ外国のりんとした歌曲だった。（中略）せまる死の影と首すじをなでる十代の風。その両方をなめらかにひとつにまとめる母国語の歌がほしいとおもいました。」と。

ちょっぴり切なくて、けれど何だかあたたかい気持ちになれる「歌」を選びました。お聞きください。

「いざ起て戦人よ」

この曲の作曲者は楽譜にもあるように、グラナハムさんだと言われています（私もずっとそう思っていました）。しかし、それは間違いのようです。実際のところは、マクグラナハンさんです（合唱雑誌「ハーモニー」による）。日本では、非常に勇ましく男声合唱の定番ですが、こちらも実際にはドイツで作詞されアメリカで英訳・作曲された静かな讃美歌だということです。

「フィンランディア賛歌」

フィンランドというと皆さんは何を思い浮かべますか。サンタクロースでしょうか。ムーミンでしょうか。私たちが本日歌う「フィンランディア賛歌」は、シベリウスがこの曲を書かなければフィンランドという国は存在しなかったというくらい、当時の社会を大きく揺さぶった曲です。歌詞の内容は、当時ソビエト連邦の支配下にあったフィンランドの人々を奮い立たせるものであり、現在、フィンランドでは国歌（「我らの地」）に次ぐ第二の愛唱歌として広く歌われています。

「見上げてごらん夜の星を」

1963年に放映された「見上げてごらん夜の星を」というミュージカル映画の主題歌です。楽曲も同年に、主役の坂本九さんによって歌われ有名になりました。坂本さんは1985年に残念な事故でこの世を去ってしまいましたが、毎日空から僕たちの幸せを祈ってくれていると思います。感謝をこめて歌います。

第３ステージ

混声合唱組曲
「心の四季」より
「風が」

移り変わる季節と日々移り変わる自分とを対比させているように思えます。作詞の吉野弘さんは山形県出身の詩人で、結婚式の披露宴でよく引用される「祝婚歌」をはじめ、国語の教科書にも掲載された「夕焼け」、「I was born」などが有名です。

「人は見えない時間に磨かれている。」

年をとることは決して衰えを意味するのではなく、むしろ年を重ねることによって、自分自身の輝きが増していく。そんな気持ちが込められているのではないでしょうか。

混声合唱曲集
「光と風をつれて」より
「あいたくて」

人はみな、誰かに出会い、何かを伝えるためにこの世に生まれて来たのではないだろうかと感じさせられます。作詞者の工藤直子さんは言っています。「きっとヒトはみな、自分の中に『言い表せないナニカ』を抱いているんじゃなかろうか。絵や、音楽、詩などに出会って『ナニカ』が動いたとき『共感』がうまれるんじゃなかろうか。」と。私たちの歌声が、皆さんの「ナニカ」を動かし「共感」が生まれることを願って歌います。

混声合唱組曲
「水のいのち」より
「川」

激しく流れる川。「何故さかのぼれないか。山にこがれて．．．。空にこがれて．．．。だが、やはり下へ下へとゆくほかはない。」その川はまぎれもなく、日常という荒波の中を生きている私たち自身ではないでしょうか。逆巻く川の激流が、人間の悲しみや憧れを代弁的に表しています。それを歌いあげる詩とメロディーは非常に美しく、歌う者のみならず、この音楽に触れる者すべての心に強く残ります。

混声合唱とピアノのための
「花に寄せて」より
「てっせん・どくだみ」

「花は自分の美しさを知らないから美しいのだろうか　知っているから美しく咲けるのだろうか」

一瞬にして身体の自由を奪われた男が、口に筆をくわえて絵を描き、口に筆をくわえて想いを詩に託しました。見えていなかったことが、見えてきました。感じられなかったことを、感じることができるようになりました。

「人は自分の輝きを知らないから輝いているのだろうか　知っているから美しく輝けるのだろうか」

こうして生きていることが本当に素晴らしいと感じます。

混声合唱組曲
「筑後川」より
「河口」

「阿蘇に降った雨が、せせらぎとなり、川となり、流風物と人々の暮らしを映しながら、大河となって有明海に出ていくまでを、自然と人間の調和の″讃歌″として歌いあげます。（曲集巻頭より）」

団員の中には、筑後平野まで行ってこの歌を歌ってきたものもおります。この演奏会のフィナーレをかざり、団員一同心をこめて歌います。

指導者の紹介

私は高校時代、合唱部（名称は音楽部でした）に所属していました。
「歌うことは訴える〔うったう〕ことである」そして「メンタルハーモニー」。当時、恩師が常に口にしていた「言葉」です。「この言葉」を胸に７０数名の部員は練習に励み、２度の全国大会出場を果たしました。以来「この２つの言葉」は私の心の中に刻まれています。プレーヤーではなくディレクターとなった今、私は「この言葉たち」の本当の意味を理解しました。
先日、スロベニアの合唱団の演奏会に行きました。演奏は言うまでもなくどれも素晴らしいものだったのですが、最後に歌った日本語の歌は、それまでのどの演奏よりも感動的なものでした。彼女たちが歌っていたものは日本語であり、日本語ではありません。なぜなら、彼女たちは日本語を母国語としていないからです。
しかし、私は感動しました。日本語という言語の「響き」に感動したのです。
本日私たちはすべて日本語で歌います。恩師が口にしていた「２つの言葉」とともに「日本語の響きの美しさ」を表現できるよう、そしてその「想い」が皆様方の心に届きますように。

指揮者　飯塚 城永

・北海道出身、神奈川大学外国語学部卒業
・高校時代、合唱に出会い、北海道代表として２年連続全国大会に出場
・大学時代、男声合唱団に所属し、学生指揮者を3年間務め、卒業後、数々の合唱団に所属し、独学で指揮法を学ぶ。
・初任の横浜市立金沢高校で合唱部を創立し、NHK合唱コンクール神奈川県大会初出場で銅賞。翌年、全日本合唱コンクール神奈川県大会初出場で銀賞
・現在、横浜市立南高校に勤務のかたわら、金沢高校PTA混声合唱団指揮者を務める。

ピアノ伴奏　福島 富士子

・東京都出身、東京大学大学院工学系研究科修了。博士(工学)。都市計画専攻
・まちづくりと介護事業を手がけるNPO法人「らしく並木」代表
・5歳よりピアノを始め、大学では「東大ピアノの会」に所属
・1999年より大倉山記念館の室内楽講座に参加。岡部由美子、佐藤慶子、島村洋子の各氏に師事
・金沢高校のPTA会長だった2001年よりPTA混声合唱団ピアニスト。現在、同校の後援会会長と土曜講座数Ⅲ講師も務める。

顧問　岩田 正満

・神奈川県出身　玉川大学学芸学部卒
・ピアノを野上登志子、新沼康博に師事。コントラバスを本間園子に師事。指揮法を藤本晃に師事。大学時代はオーケストラ部に所属し、合唱団指導や作曲なども幅広く活動
・卒業後、港商業、南高校を経て現在、金沢高校教員として勤める。
・現在、県高文連器楽管弦楽専門部会理事として県高校合同オーケストラ等高校生の音楽活動の育成・普及に努めている。

合唱団の歩み

1991年	この年、金沢高校が創立40周年を迎え、12月の記念演奏会で生徒・保護者・教職員有志が歌劇「ラ・ボエーム」より３曲を日本ニューフィルハーモニー管弦楽団の演奏で合唱する。
1992年	記念演奏会のメンバーが中心となって、当合唱団が結成され、金高祭や金沢区音楽のつどいに参加する。本校の英語科教諭だった飯塚城永先生が指揮を、同じく音楽科教諭だった床井のり子先生がピアノ伴奏をされる。
1996年	飯塚先生が他校に転任されたが、引き続き指揮を続けられる。
1997年	神奈川県合唱連盟に加盟し、神奈川県の合唱祭に初参加する。高校のPTAの混声合唱団は県内でも珍しい存在として、審査員より励ましの言葉をいただく。
2001年	金沢高校創立50周年にみなとみらい大ホールで記念演奏会が開かれ、生徒、卒業生、教職員、新旧保護者等あわせて418人が神奈川フィルハーモニー管弦楽団の演奏のもと、ベートーベンの交響曲第９番「歓喜の歌」を歌う。これを機に何人かの新たな団員を迎える。
2002年	床井先生が他校に転任され、後任の音楽科教諭となった岩田先生が当合唱団の顧問となり、また当時PTA会長だった福島富士子さんがピアノ伴奏を引き受けられる。
2005年	岩田先生が1月から10月まで指揮者を務められる。
2006年	岩田先生が9月から翌年4月まで指揮者を務められる。その後も入学式や金高祭で指揮いただく。合唱団員の中に徐々に自分たち自身で企画運営しようという自覚が高まる。
2007年	言葉を大切にする自分たちの歌を多くの人に聞いてもらいたいという気持ちが団員の中で育っていき、合唱団創立１５周年を機に独自の演奏会の企画がスタートする。
2008年	第１回演奏会を開催する。

団員

ソプラノ	石井　敬子	大串　和子	岡野 奈保子	小野　博子	北村　礼子	小島　朝子	
	児島 アツ子	後藤　玲子	近藤　博子	斎藤 実枝子	佐藤　和子	佐藤　末美	
	佐藤 美代子	清水　玲子	鈴木　孝子	武久　裕子	田中　佳子	千田　敏枝	
	中川 みどり	西田　良子	日置　正子	福永　栄子	松浦 アヤ子		
アルト	秋元　伸子	今関 美津枝	大久保 多美子	大澤 れい子	岸　れい子	菅野　晶子	
	住田　温子	清水　静代	千葉　祐子	中塚　路子	西村　順子	西山　澄子	
	廣田　幸子	山本　美保					
テナー	国吉　一夫	清水　重雄	田中　英史	三森　貴樹	宮崎　淳司		
バ　ス	岩方　辰旺	西村　一	野田　康之	森田　賢一			

合唱団役員　会長：清水　玲子　　副会長：宮崎　淳司　　会計：小島　朝子／松浦 アヤ子

実行委員会　委員長：森田　賢一　　副委員長：清水　玲子／田中英史

協力者（敬称略）

ステージ・マネージャー：稲村　徹

演奏会サポーター

石井　亜美	岡野　三郎	酒井 富美江	佐藤　亮子	清水　陽太	千田　基子	
千葉　啓祐	外山 美恵子	西田　沙織	日置　圭介	福島　望	松浦　由華	